

令和元年度病害虫発生予察情報 発生予報第14号

令和2年3月13日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稻 (育苗期)	いもち病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	①未消毒種子を使用する場合は、薬剤や温湯により消毒する。 ②育苗箱施薬を使用する場合は、育苗ハウスの床土に薬剤が飛散しないよう注意する。
	ばか苗病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並と予想される(±)。	①生物農薬や温湯による種子消毒を行う場合は、温度や時間等の処理条件を守る。 ②罹病苗は、見つけ次第ただちに抜き取り、本田には持ち込まない。
	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	天候予報(仙台管区気象台2月25日発表3か月予報)によると、4月の気温は平年並から高いと予想されている(±)。	4月の天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いと予想されているため、ハウス内の急な温度上昇に注意し、適切な温度管理を行う。特に、出芽時の高温や育苗期の低温を避ける。
	もみ枯細菌病	全 域	—	やや多い	①種子更新率は平年並と予想される(±)。 ②天候予報によると、4月の気温は平年並から高いと予想されている(+)	①生物農薬や温湯による種子消毒を行う場合は、温度や時間等の処理条件を守る。 ②4月の天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いと予想されているため、ハウス内の急な温度上昇に注意し、出芽時や育苗期の30℃以上の高温や過湿を避ける。
	苗立枯細菌病	全 域	—	やや多い	①種子更新率は平年並と予想される(±)。 ②天候予報によると、4月の気温は平年並から高いと予想されている(+)	もみ枯細菌病に準じるが、もみ枯細菌病に登録があっても本病には登録のない薬剤があるので、使用の際は注意する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果 樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	リンゴハダニ	中通り北部 中通り南部 会津	— — —	やや少ない 平年並 平年並	越冬卵が確認されたほ場の割合は、中通り北部で平年よりやや低く（－）、中通り南部、会津で平年並であった（±）。	防除暦に従って、発芽1週間前までに防除薬剤を散布する。
モモ	せん孔細菌病	全域	—	やや多い	前年秋期の新梢葉における発生ほ場割合は平年よりやや高く（＋）、発生程度の高いほ場も見られた。	春型枝病斑は開花前から発生することがあるので、ほ場内をよく観察し、徹底して除去する。 開花直前の防除を徹底し、多発が予測される場合には落花直後に特別散布を行う。
	モモハモグリガ	全域	—	やや多い	前年の越冬量調査において、発生地点割合は福島地域で平年よりやや高かったが（＋）、伊達地域では平年並であった（±）。	初期の発生密度を抑えるために、第1世代幼虫発生期（落花10日後）にネオニコチノイド剤を散布する。
	シロカイガラムシ類	全域	—	平年並	前年秋期の側枝における寄生ほ場割合は平年並であった（±）。	発生が多いほ場では防除暦に従って、発芽前にマシン油乳剤を散布する。
	コスカシバ	全域	—	やや少ない	前年秋期の発生ほ場割合は、平年よりやや低かった（－）。	
ナシ	黒星病	中通り 浜通り	— —	やや多い 平年並	鱗片における越冬病斑の発生ほ場割合は、中通りで平年よりやや高く（＋）、浜通りで平年並であった（±）。	重点防除期である開花直前、落花直後をはじめとして薬剤防除を徹底する。
	ハダニ類	中通り 浜通り	— —	平年並 やや多い	越冬卵が確認されたほ場の割合は中通りで平年並（±）、浜通りで平年よりやや高かった（＋）。	発生が多いほ場では、防除暦に従って、発芽10日前までに防除薬剤を散布する。

注) 予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	多発すると防除が困難になるので、発生初期から薬剤防除を徹底する。
	灰色かび病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は、やや低かった(-)。	①過湿にならないよう換気を行う。 ②発病果や罹病した果梗、老化葉などはハウス内に放置しない。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	低密度時から薬剤防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	①発生ほ場割合は、平年よりやや低かった(-)が、一部で寄生程度の高いほ場が確認されている(+)	①低密度時から薬剤防除を実施する。 ②抵抗性の発達が懸念されるので、殺ダニ剤の選択には注意する。 ③カブリダニ等天敵資材を放飼している場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、やや低かった(-)が、一部で寄生程度の高いほ場が確認されている(+)	寄生程度の高いほ場では、すす病の発生が懸念されるため、低密度時から防除を徹底する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	発生が多くなると果実被害が生じるので、低密度時から防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、 (-) は少発要因、 (±) は平年並要因であることを示す。

より詳しい発生状況や防除対策は、福島県病害虫防除所ホームページ <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/> を御覧ください。

お問い合わせは TEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727 または e-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jp へお願いします